小池清氏追悼の部

小池の思い出

二十年卒　中谷　滋

小池についての最初の記憶は、彼が一緒に府立高校尋常科に入学した者のなかで、一番小さく、そして小鳥のように可愛らしかったことである。しかし、この小鳥のような人形のような小池は我々と一諸に水泳部に入ると、あの体のどこに潜んでいるかと思われるような力を発揮し出した。彼の体つきは弾力的で、足が長く、恐らく水泳に―それも背泳に―特に適していたのだろう。先輩の上原さんとか中島さん(旧姓)とかのノッポの背泳の猛者と並んで少しもひけをとらずにあの小さな体が水をスイスイ滑っているのを見るのは快よかった。記録的にも、七年制大会で何時も上位を占めていたことは諸君も御存知であろう。

水泳部生活で小池について特にエピソードというようなものは記憶にない。ただ、彼が実に頑張り屋で、おかしな口実で練習をサボったことなど一回も無いということが、不思議に強く記憶に残っている。彼は先輩や主将に云われたことは、厭な顔一つせず誠実にやり通した。ここでもう一人の我々の亡き仲間、作間のことを持出すのも唐突だが、作間は同じように物事を誠実にやり通したが、彼の場合歯を食いしばって我慢するようなやり方が彼の「楽しみ」だったのに対し、小池は全く超人的に平気な顔で苦痛に臨んでいたように思われる。

高等科で彼は理科へ行き、また戦時動員で我々文科生とは別れ別れになった。戦後、大学で会う毎に、彼は千葉の山の中を歩き廻り、石油を探しあてるのだと云っていた。それは勿論純粋に学問上の仕事であったのだろうが、彼の水泳部での生活態度と、一人で千葉の山中に石油を求めて歩き廻っている姿とは何かしら連続しているように感ぜられた。

その彼は、今や亡い。作間と云い、小池と云い、俗塵に容易にまみれない純朴、誠実な人間が早死にしたのはどういう天の摂理であろうか。小池が酔をさますために汽車のデッキに出ていて、振り落されたという話を聞いた時、私は耳を疑った。あの小池がだらしのない酔漢のような真似をする訳がないと思った。しかし今考えてみると、作間にしても、小池にしても、処世というか、身命の保全というか、そういうものに対して不用意な面があったのではなかろうか。嬰児が火にたわむれるような所があったのではなかろうか。私の眼には、尋常科へ入ったばかりの頃の、あの真新らしい帽子を冠った小鳥のような小池の顔が浮んでくるのである。

小池のこと

二十年卒　山田二男

「オオ、山田か。大変だよ」金子から電話である。「何が大変だ」「小池が死んだんだ」。この時ばかりは物におどろかない俺もさすがにビックリした。なるほどこれは大変だ。在学当時の彼の面影が次々と浮んできて仕方がない。彼は背が小さくて、何となく女性的な感じだったが、信念の強い男だという事が付き合ってみるとわかる。頭もすごく良かったとみえて、俺は勉強しないで成績が悪かったが、彼も勉強をしないクセに成績は悪くなかった。小柄なくせによく食った。練習のあとウドンもよく食った。氷もよく食った。帰りに裕天寺で途中下車して、駅前のセンベイ屋でセンベイを買い込むのも習慣？だったらしい。長じてからは酒もよく呑んだ。或るクラス会の帰り、明神下のノミ屋でチュー太郎をのんだ。俺もよく呑んだが、彼の方はもっと呑んだ。彼は有望な地質学者だった。府立に入ったばかりのとき地理の先生をしていた民科の井尻正二さんの弟子になって、日本の国土の歴史を調べていたらしい。研究がまとまりかけていたとか聞いていたが、彼は学問に対してすごい情熱をもっていた。その彼が、愛する学問と愛妻と愛児とを残して死んでしまった。全く惜しいことをした。俺たちの仲間のうち優秀な二人、作間と小池とが事故死で亡くなってしまったのだ。大きな損失、府立の水泳部にとって、いや日本にとって。

彼の葬式に行ったとき、田町の交叉点を、めずらしく青信号で（いつもは斜向いの黄色信号でとび出す俺だが）渡ったことを今でもおぼえている。

小池清君のこと

二十年卒　金子常郎

小池清君の命日がやってくる。はや六回忌になるものか。

あれは一入寒さの厳しい晩だったように思いなされる。ぼくは会社の仲間の一人と新橋で杯を傾けていた。そして、その相手に小池のことを語った。たしかに大分倦んでいたようではあるが、小池とは全然縁もないその相手にどうして、あゝも熱っぽく小池という友人の話を聞かせることになったのか、翌日にも思い出せなかった。相手も一寸変だったといった、

小池には大分長い間逢っていなかった。前の年の暮に、何かで電話した覚えはあるが大した話はしなかったと思う。いつでも逢える筈だし、当面その必要もないと思っていたのである。

あれが虫の知らせといふものだったのかも知れない、あとで考えても不思議な程、小池のことをこまごまと話したのを覚えている。

昭和卅二年一月廿二日の午后十時前后から十一時すぎまでのことである。

丁度、その時、刻々小池は今にも永遠に僕から去って行こうとしていた。彼はぼくから二駅とはなれていない国電浜松町、田町の間で列車から落ち、瀕死の重傷を負っていたのであった。

翌朝、小池の事故死の報道を目にして驚いたが、全く信じられなかった。彼の定期券でも借りた人物の間違いだろうと思った。それはぼくらのよく承知している彼の人格にとうてい結びつきようのない事故だったから。筧（ぼく等と同期の水泳部の先輩）に電話して確かめると、鉛でも飲まされたような違和感におしひしがれた。

小池は昭和十四年の四月、ぼくと一緒に当時の府立高校尋常科甲組に入学した。そして、六年間、偶然に同じクラスで過した。そういうクラスメートは小池一人であった。

彼はいつも小さい方から二、三番目で、背の順に並んだ教室の机で、丁度一列分位、ぼくより小さかったから、毎年彼はぼくの前か斜め前あたりにいて、この関係はずっと変らなかった。そんなことが彼と親密になった理由の一つだったらう。兎に角、小池の思い出といえば、どれもぼくの都高時代の思い出につながっている。

彼の少年時代の印象にはどこか人形めいた可憐さがある。まんまるで小さく形のよい頭と長い脚をもち、バランスのとれた身軀をしていて身軽であった。いわゆるベビー・フェースで、顎がまるく女性ならさしづめ反って美人に見せる程度の反歯であった。それに八重歯もあって笑ふと一層幼げに見えた。尋常科の三年頃からだろうか、つるの細い目鏡を用いていたが、かけっ放しだと度が進むと称して永い間教室だけで用い常用するのを避けていた。いかにも小池らしい慎重なやり口ではあるが半分はたしかにテレかくしである。実際、彼はひどくはにかみ屋であった。あらたまって人と話をする時などは目を伏せ、言葉を押しやるような一寸甘えた喋り方をする。それによく笑った。滑稽な話をしていると内容を伝えないうちからくすぐったそうにグクッと笑い出すと云った風である。彼の書く字がまた特徴があった。細かくて、几帳面で、余白が多くて、彼の外貌そっくりの字を書いていた。

こう書いて来ると、いかにも大人しくて、女性的な人柄が想像されるかも知れない。たしかにそういふ面もあるのだが、大体、自我をむくっけに出さない性なのである。自分で思ったことは秘かに着実に実行するとか、土端場にくると身軽に転身してしまふといった風の妙にねばり強い芯にぶつかって驚かされることが間々あった。

小池のよいところがのびのびと出ていたのは水泳部だったと思う。大体スポーツは何んでもかなり器用にやったが、みな遊びの程度であった。しかし泳ぎだけは特別である。バックに関する限り彼のように軽快で見事な泳ぎは見たことがない。水にはよくのって胸から首が楽々と水の上に出て実にのびのびとしたフォームであった。手首まで真直に伸した腕を頭の上で少し捻って小指から水に入れる。それがリズミカルで、一寸まねの出来ぬ魅力であった。小さいなりにダイナミックでスピード感があった。実際ずっと後までも彼の記録は残っていた筈である。その泳を見ているとバックをやる気がしなかった。が、ぼくは部活動をさぼってばかり居たのだから泳ぎのことは根来や中谷にまかせよう。それにしても、こうした運動に身を入れなかったことはいまにして残念だと思っている。その頃も先輩からさぼるとあとで残念に思うようになるとよくいわれたものであった。考えて見ると特別な理由があったわけでもない、一種の引込思案だったのだ。いまでもそういふ人がいるだらうか、もしそうなら気がねしないで思い切って泳

いておくことだそういう機会はあまりないのだから。

小池はそういうぼくに一度も忠告めいたことを云ってくれたことがない。一体、彼は他人に立入ったことはちっとも喋らず、自分のことはよく嬉しそうに話した。そういえば当時の仲間はみんなそんな風であった。

尋常科を終る頃だろうか、外見は相変らずもとの小池らしかったが、内面的に急に変った。大人になったといふのか、彼独自の計画的で意志的な歩みをはじめた。彼が生涯の方向を地質学にえらび志をかためたのはその頃だったらう。

現在、古生物学に目立った活躍をされている井尻正二先生に尋常科の一年足らず地理を教ったことがある。台湾の略図を書いて次の都市と北緯何度の線を記入せよ、といった変った試験を出され、縮尺を記入しないで甚だしく減点されたのを覚えている。印象深い先生だった。

何故、この井尻先生に彼が魅せられたのか、彼の地質学への関心が先生を思い出させたのか、二、三年たってぼくらが大方先生の記憶も薄らいだ或る日小池はひとりで井尻さんを尋ね、自分の進むべき道を相談したと語ってぼくを驚かせた。それは非常に勇気と意志の必要なことに思われた。それから暇があるとひとりで山を歩いて石をひろいはじめた。また病気は食養生で直すと当り前のようにいった。毎日一冊の本をよむともいって、それを実行していた。大体科学の啓蒙書や、岩波文庫である。

ぼく等のその時代は戦争のさなかであって学業は勤労動員に、スポーツは教練に変えられた時代である。考えて見ると真当のものは読書の中にしか無いように思われ、ぼくも小池につられて文庫本などに耽ったものである。しかし、その本の入手すら自由でなく、欲しいものは借本屋から保証金を払って失敬した。彼は本の虫であった。たとえばこんな時代ばなれのした思い出もある。彼は市電にのると必ず左の窓辺に立って街頭を見て行く。つまり往きは左、帰りは右側の店を確実に見ることになる。こうして借本屋を探すのである。発見すると機会ある毎にしらみつぶしに本を渉って歩く。

そんな一時期があった。このエネルギッシュで着実な方法には全く驚かされたものだが、彼の生き方をよく表わしているように思ふ。専門の地質学においても、多分にこのような方法が必要で彼にうってつけだったのかも知れない。昭和廿年に望みどおり東大の地質に入った。その後、彼から、東京湾の府を楳っているところだ、三浦半島と房総半島が地質的につながっていることを実証するためだ、などと聞かされたことがある。

学者になることに就いて、彼は家業を気にしていたらしかった彼は長男で、お父さんはすでに亡かった。家のあとつぎは弟にまかせて、僕は好きなことをさせてもらっていると感謝の気持をよく口にした。

ぼくらを驚かしたことはまだある。大学時代、しばらく逢わぬ間に、すごく太ってしまって、顔付や背丈は昔のまゝなのに、見違へる程になってしまった。それから、酒豪の素質を発揮し出したことだ。こちらがお銚子一本の間にショウチュウを二杯位あけてけろりとしていた。彼の性格からしても、恐らく酩酊することはなかったに相違ない。

しかし、これらの変貌は彼の運命に必ずしも幸しなかったのだ

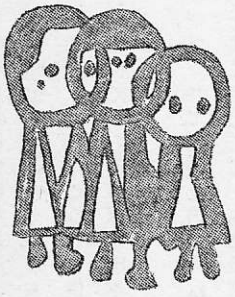
と思ふ。

心臓のことが災いして、南極探険の仲間に入り損なったのだそうでこれもその一つである。

死の前年の二月結婚し、学会の栄誉ある賞をうけ、十二月に長女が生れた。彼の地質の仲間から聞いたところによると、その頃地層の堆積は従来の通説の如く海中のみでなく陸上に於ても行われるという説をなして、千葉県の黒滝という場所の地質を研究中で、毎月一回黒滝の会といふ仲間の討論会がもたれていた。奥さんは藤沢の実家で出産した。その結果、彼は住いの中野のアパート、大学藤沢の間を往来し、学位論文のこともあって多忙であった。子供の世話をやくので睡眠不足で疲れているとうれしそうに洩らしていたといふ。心臓の方も完調とはいえなかったらしい。しかし彼は多忙であることに生甲斐を見出していたであろう。

一月廿二日、中野のアパートで黒滝の会がもたれ、四人でトリス一本あけた。但しこれは、彼がホロ酔にすらならない量だといふ。藤沢へ戻る予定でなるべく早く帰るといゝおいてあった。東海道線は夜、十時を過ると近郊の小駅に止らぬダイヤがつづきあとは大分遅くなる。奥さんに頼まれた荷物をかゝえて彼は急いでいた。今更のように傷々しい思いがする。小池の持っていた中野駅発行の切符から判断すると、普通ではその九時四十何分だかの列車に間に合わないのだ相だ。発車間際にすべり込んで、混んでいたのでデッキに立っていたが、新橋を過ると昇降口に腰を下したのを側の乗客が認めている。苦しかったのかも知れない。そして恐らく田町駅にさしかゝる辺のポイントあたりで重心を失したと思われる。そこは汐の差し引きする堀割だった、そのため発見も遅れてしまったといふ。殆んどおこりそうもないことの連続である。病院では英語でウワ言をいった相だ。近く英語で講演するとかで、一生懸命だったのだろう。廿三日の早暁、彼は世を去った。

それからしばらく、ぼくは、やり場のない悔恨のような思ひをかみしめねばならなかった。

以来、ぼくをかたちづくっていた或る大きな部分が欠け落ちてしまった。それが小池を失った実感である。

※小池清氏は三十一年にお亡くなりになりましたが、その後、黒潮が発行されない為、今日迄、黒潮紙上に、その追悼記を載せる機会がなく、この度、やっとそれを載せることになったわけであります。